

声が聞きたい

Voice

えひめ

ひと月の県人

イター時代の体験談を聞いた同校2年の玉木葵(14)は「真穴の良いところを考えるきっかけになった」と振り返る。

玉木家は3年前からアルバイターを受け入れている。収穫期間中は一緒に夕食を食べたり、漫画を貸し借りしたり。妹の蘭(9)は、最初の年に来た兵庫県に住む元アルバイター「みきちちゃん」と文通を楽しむ。学校の出来事などを知らせると、返信のかわいらしい封筒に北海道や沖縄への旅行の写真が同封されていることもある。

「当たり前だが、とってもあの時の私にとってうれしかった。豊かな心を見習います」

2009年2月、真穴中を訪れた女性のアルバイ

海外での生活や、趣味のロッククライミングの話をしてくれたアルバイ

ターもいた。姉妹は「ことは何人来るかな、どんな人が来るのかな」と心待ちにしている。

父勝広(43)は「子どもも最初は人見知りするけど、慣れるのは僕らより

早いぐらい。普通なら経験することのない話も聞けていい勉強だと思えますよ」と言う。母道子

(40)は「今度来る子は食べ物や口に合うか、好き嫌いはないかいつもド

キドキ。でも帰るときに『家族っていいなあ』『帰ったら親孝行したい』と言ってくれるとうれしい」。

アルバイターが真穴を離れる前に渡してくれ



元ミカンアルバイターから届いた5通の手紙を持つ玉木蘭。自作のフェルトで飾られた手の込んだ封筒もある＝5日、八幡浜市穴井

た、家族一人一人にあてたメッセージボードは一家の宝物だ。

埼玉県で生花店を営む草薙卓(32)は店先に、常連客のお茶菓子代わりに真穴ミカンが入った小さなかごを置く。真穴ブランドを全国にPRしたい、というアルバイター事業の出発点を知ってのさざやかな協力だ。サクラの寄贈を旧友に持ちかけたのも草薙だった。

今回選んだ「サクラ」も、真穴にふさわしいものをと知恵を絞った。メッセージが伝わるのは花が咲くとき。ことしか数年先か。まだ分らないが、子どもたちの喜ぶ顔を思い描いている。

(森田康裕、文中・写真敬称略)

〈随時掲載します〉

「古里」への贈り物②

離れてもつながる心

収穫作業が終わる前、ミカン山から見た夕日の美しさ。真穴の町を歩い